

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	総務部だより・東上記 : 部報
Author(s)	高木, 貞年
Citation	龍南, 235 : 77-92
Issue date	1936-11-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7355
Right	

總務部だより

總務・文三乙 高木貞年

I 昭和十年度

九月廿一日 理科のみ選挙が行はれて午後一時瑞邦館に於て山本多田兩總務立合の下に開票。理二乙小林節昭君が當選した。文科は無競争、不肖私が文科總務の任を汚すことになつた。

十一月二日 總務事務引繼が行はれた。愈々我等の天下、存分に腕を振ふべきだが明後年は母校にとつて重大な創立五十年だ。氣持は縁の下の力持であれよかし。

十二月三日 教官會議室で昭和十一年度龍南會豫算會議を開く。此れの成否が直に總務部の鼎の輕重を問ふ云はゞ一つの試金石であるから、あれやこれやと策を練つたが權謀術數は破綻の基、正直は最上の策と悟つて赤心を他人の腹中に置いた。幸に校長先生の取りなしで事なきを得たのは幸前より首途の置土産であつた。

十二月廿四日 今日で二學期も終つた。

2 昭和十一年度

一月八日 愈々三學期だ。

一月十三日 前年度委員記念品を決定。

一月十九日 折からの寒天を衝いて兎狩す。

二月八日 昭和十年年度綜合競技對組爭覇戰優勝楯授與式が瑞邦館で備され、榮光燦然たる楯は校長に依り嚴かに理一甲三組長の

牛に授けられた。

二月廿七日 奉安殿遷座地鎮祭が行はる。

儀式簡素乍ら恭しき極み、神主の白衣東帯も目に染みて覺ゆ。三月三日 第四五回叙別式は舊濟美館——註、現雨天体操場——に於て行はれた。去る人、送る者の言葉、すべて悲哀を含み、

しかも春秋を頼む希望に滿てるものであつた。

三月十日 學期試験は濟んだが及落が心配。

四月九日 型の如く講堂に於て昭和十一年度入學式が行はれた。

四月十日 新學期始業式に於ける校長の訓辭はあらゆる譬喩を引いて高校生のお全體を闡明し、五十年を背後に控へて大いに苦心奮勵すべき旨を主張された。その説き來り説き去る所近來白眉のものであつた。

四月十五日 ポートレース準備万般打合せ。

五月一日 デモを政行して氣勢を擧ぐ。

五月三日 ポートレースにて畫津の湖水は終日に立騒いだのであつた。

七月四日 校長各部長生徒課列席の下に講堂に於て選手推戴式が舉行された。

七月十日 さあ明日から夏休みだ。

七月廿日 弓道部が覇權獲得。

七月卅日 水泳部が競泳で優勝した。

(昭和十一年立秋の頃)

東 上 記

總務・文三乙 高 木 貞 年

一、はしがき

矢繼早に車窓から望み見る翠巒の山脈と銀蛇の河川とが幾つもの自然を示し、著しく高底のある訛を持つた言葉が厚薄の人情を含む。此の故にこそ、旅の苦勞は買つてもせよと云ふのである。秘められた實相が蒼然たる古色の中に浮彫りとなつて現れる。名所古蹟を訪ふのも此の意味に於てである。

「可愛い子供には旅をさせろ。」と云ふ諺がある。其は人情反覆の間、人間性の根本を把握して以て處世術たらしめんと愛兒に教へる親心である。

夫れ人生は旅である。浮雲の遊子よ——自然を知れ、人情を得よ！

二、羈枕旅泊

家にあらば筒にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる——萬葉集卷二——

1、京の印象

(イ) 人と街 京都は死せる街である。兵燹に燒盡しようが天災に倒壊しようが永久に金閣と銀閣とに依つて代表される都である。東山卅六峯に圍繞された池沼の如き洛中は俯瞰すると白つぽい瓦の波が其處彼處に起伏してゐる。此地に住む人々は例へばインクラインが通じようと或ひは又大學が出來ようと、加茂の靜か

な流にも似て昔乍らにゆつくりと歩み、しんみりと語る。流石に平安朝以來今日迄東海扶桑國の首府だけあつて、そのかみ牛車の軋つた都大路の餘韻が響つてゐる。

(ロ) 古今譚 鞍馬山や愛宕山の天狗は廣く人工に膾炙してゐる。即ち京都は到る所傳説の匂に満ちてゐる。私は何時か朝氣冷々たる吉田山下の薄明中に烈しい劍戟の響を聞いた。其は我が劍道部狂者連の殺陣であつた。——當所にて、遠くは應仁大亂が起つた。牛若丸の五條橋は三歳の童兒も能く知つてゐる。近くは紫影宛然蒲團の如き東山を脊負つて三條大橋に骨と血を争つた勤王佐幕の對立が劇しかつた。此等は悉皆暗々裡中に血氣の若人には無二の強烈な刺戟劑となる。況んや此を飾るにダラリ帶もなまめかしい祇園舞妓の婀娜姿あるに於てをや。——正に知る可し、今尙、此處にはチャンバラで飯を食つてゐる人の多數存することを。

2、鯨城偉觀

(イ) 三名城の一 慶長年間に大御所家康が天下の財を傾け築城の名手清正公が濶奥を盡して築造した此城は天下三名城の一に數へられ、規模の廣壯樓殿の麗美は正に宇内を壓してゐる。即ち「——尾張名古屋は城でもつ。」云々の里諺を持出す迄もなく、佐様に著名であり、八方無限の養穹を摩するが如く聳え立つた天守閣上の金鯨は燦然たる光輝を放つて 人々は遠くから此を望見することが出来る。市廳の先輩の御厚意で私は一日ゆつくりと此城を拜觀させて頂いた。中に入れば、金泥銀泥の屏風には當代の名手が其名を列ねて妙筆を振ひ、鸞張の廊下は吾生をして神域に遊

ぶを覚えしむ。宜なる哉、昭和五年迄は離宮の光榮を賜つた城である。

(ロ) 市勢概要 廣小路を中心として、大須觀音は江戸の淺草である。松濤筋は京都の新京極とも云はうか。或夜私は散歩に出て人波に押され、途々鶴舞公園迄來て了つた。折柄の公園祭に夕涼みを兼ねた市民の人は出は陸若たるものがあつた。その歸るさ、傍の公會堂で社會大衆黨の公開演説が催されてゐた。阿部、片山、三宅、淺沼等の議會の鬪士の火の如き或ひは水の如き大文字が三寸の舌端より吐露されて、其主張の是非は別として私は何か頭の下るを禁じ得なかつた。聞けば支部新設の記念講演會とか。成程、中京も發展したものだ。

3 東京素描

(イ) 銀座風景 向側で父親が手招いてゐる。エトランゼの少女が二人灰白色の鋪道を小走りで横切り始めた。圓タクが疾驅した。彼女等は立止つた。電車が右に間近に迫つた。二人は手に手を取つて駆出したが、瞬間帽子が突風に煽られて轉がつた。氣付いて拾はうとしたが車の往來が劇しいので其儘向側に達したけれども首をかき上げて見つめてゐると、やがて電車が停止して運轉手が車輪の寸前から靜に拾ひ上げた。淡緑の柳の蔭でエトランゼは帽子を打振り乍ら幾度もダンケを繰返したのであつた。

(ロ) オフィス街 丸の内は東京の否日本のビジネスセンターである。赤煉瓦や鐵骨のビルディングが青空を直線に切斷して、近代建築美は多角美にあるのだ。私は此處を歩いてゐる中に、此處で先聲に拜眉してゐる間に將來必ずや此の一角を占領すること

を決心してしまつた。

4、南都大阪

(イ) 商人根性大阪城は鐵筋コンクリートである。エレヅエターで昇降が出来る。世俗に「氏より育ち。」と云ふが、争はれぬ浪速商人の算盤勘定を其處に見ることが出来る。成程東京に比べて街は狭かる、人口は少かる。併し大阪城の石垣が表示する如く、彼等の土性骨は比較にならぬ位太くてどつしり坐つてゐる。私は此點が大阪のもつ唯一のズバ抜けた特色であらうと思つた。

(ロ) 都會を捨て、「太陽は家から出て家に沈む。」との言も大阪市には立派に通用する。其は八階の屋上より何處を眺めても果は家に終つてゐるからだ。併乍ら彼等の誇る道頓堀は汚臭鼻を強く叩く溝である。尤も夜さり來れば、兩岸のネオンサインは赤い灯香い灯と明滅して魔物の本体を露はす。實に大都會は妖怪變化である。此處に於て乎、私は假令書肆に購ふ可き良書は少くとも、故郷の清淨さを取らんとするものである。

5、港の横顔

(イ) 神戸港 神戸は生産地でもなければ消費地でもなくて云はゞ一種の仲繼都市である。布引の山上から望めば綠波の上に防波堤や突堤等が長蛇の如く横はつてゐて、巨船矮帆が無數に碇を下し、太平洋岸第一の貿易港の勇姿を示してゐる。あゝ、あれがメイドインジャパンの根源かと思ふと思はず快哉を叫び亂舞したくなるのであつた。

(ロ) 蒼桑の變 「嗚呼思臣楠氏之墓。」を境内に含めた湊川神社は心なしか一種獨特の持味がある様で、社前に額突くと何時の

間にか日頭が熱くなつてゐた。暫く其處から西行して新開地に達すると不夜城をなす神戸隨一の歡樂街を見出す。見よ、大楠公は此地で逆賊掌氏を殲滅せんと厲心した。而るに今人は此街で酒と女を享樂せんと苦心する。爲政者以て如何となす。呵々又呵々。

三、先人群像

今夏恒例の如く龍南會遠征各部應援激勵の爲東上した私は、その間開を盗んで諸先輩に親しく拜眉するの機を得、或ひは追懷談或ひは後輩に對する懇切な希望注意を拜聽する事が出来た。

太古創生期から私達の生活してゐる現代迄を通じて五十年、夫々各時代相に色どられた絢爛たる逸話珍談を耳にして強く感じた事は、神話の古と餘程時代の距つた現今とでは、外見何等の關聯もない様であるが、以心傳心、その實は親から子、子から孫へと相傳へる如く「剛毅朴訥。」の四字にて象徴される龍南精神の傳統であつた。即ち、社會の第一線に活躍する諸先輩の胸底深く今も尙「質實剛健。」の五高魂が赤々と燃えさかつて、四方に顯現してゐる事であつた。

猶別に記憶を辿つて會見記を物しましたが、或ひは脱漏せる時代の多數を算する所以、東奔西走の短時日中に各期一通の先輩各位の門を叩く事は極めて至難な業であると思召し願ひます。——記事が内容貧弱、無味乾燥に終つてゐるとすれば、偏に筆者の健忘と秃筆の罪であり、之に反して極めて有益且つ興味深いものがありましたら、其は先人高話の餘徳であります。——最後に一切の文責は筆者に存することを明かに致しておきます。

1、京洛先輩

(イ) 七月十七日正午京大文學部研究室に遠藤先輩訪問、名刺を通ずると板壁の色の剥げかゝつた建物とは凡そ不似合な好紳士型の先輩は、眼鏡の奥で笑ひ乍ら初對面を濟まされる。樂友會館迄先輩の後を襲つた小林と私は正にヤンチャ坊主以上と云へよう。

遠藤嘉基氏談 第卅六回卒

昭和二年 文甲

私達の時代は一口に約めて云くば所謂 *Drang und Sturm* の時代で、左翼と右翼との理論闘争が劇甚を極め社會科學研究と云ふものが漸く實行を伴ふ様になつた一大轉換期でもあつた。靜に追想すると全身の力を熱に沸してブツつかつて行つた當時の學生氣質は殆んど現在には見られないが、その一つの原因は餘りにも利己主義に執して小さく纏り重壓を撥ね返すだけの氣力も体力も不足してゐるに不拘、すべてを社會の罪に歸する逃避的退嬰的態度にあるであらう。まあ此の世に生きて行くからには即ち自分を基調として他人とか社會とか協和する事が大切である。此は餘談だが今度の京都の學生遊里立入禁止令も自律心の弱い者には結局無駄の様だ。呵々！

七高には連敗で最後は喧嘩迄したが當時の五高野球部は黄金時代で勿論應援團も仲々盛んだつた。長髪が多かつたのも其故だつたらう。卒業する頃には皆美しく刈り込んだものだが頭髪の分け方にも時代が反映してね、當時はオールバック万能だつたよ。下駄履は自治的に止めた事があつた。何しろあれは他に迷惑を掛けるし、犬も家の中に限つた話だが、今は大變少くなつたと聞いて喜んでゐる。

私は水泳部の委員を務めて居たが部長と云ふ程の者は一人もなかつた。未だプールに入つた人があゝなくてね。丁度其頃始めて熊商にプールが出来て其處で練習したものだ。九州高校水泳聯盟も結成されて愈々試合を催すと云ふので、誰か極東オリムピック選手を一人招いて唐津でコーチして貰つた。夏休になると全校生徒から希望者を募つて役場へ預けて越年させた鍋釜を取り出して唐津に合宿するのが、我々水泳部委員一年間唯一の仕事と云つてよかつた。珍談としては校内にマンドリンクラブと云ふものがあつて九州演奏旅行の途次唐津に立寄り水泳部後援にて音楽會を開催した迄はよかつたが、人数が足らぬ爲に武夫原合唱に引張り出されたのは弱つたね。唐津合宿も此年位迄で、五高のプールは私の三年生の時に出来たのだがね、新聞を利用して輿論に訴へ遂々市當局に造らせた譯である。九州中學水泳大會も此頃から催す様になつて、君、あれは仲々盛んと云ふぢやないか。

何、赤丸かね、A先生は點が辛くて、一點の差で及第にして貰つた事もあつた様だ。

(ロ) 赤煉瓦の京都日銀支店には警戒の巡查が詰めて物厳しい。七月十八日午前の強い日ざしを受けて小林と二人でのそりに入る。中山支店長は磊落な人物だが相手の心膽を寒からしめる鋭い眼光は硝子玉の下でジロリと動く。私達は宛然猫の前の鼠であつたかも知れない。

中山豊氏 第十六回卒

明治四〇年 一部英法

熊本高工と長崎醫專が五高の附屬學校時代でね。随分古い話だ

から記憶の薄れた所もあるが、どうだ、君達は未だ生れても居ないだらう。

現在では運動精神が盛に唱道されるが我々の時代は武道精神だつた。私は大分出身だつたので所謂後藤派の正統修養團體にて鍛錬され深夜から方々の山を登つたものだ。當時生活費は一ヶ月10圓、東京者が立派な夜具を持つて居り自分達は木綿で到底比較にならぬのだつたが反つて絹物の立派な方が氣が引けた。此様な場合、今は東京者を羨むのが普通で、こゝら邊が今昔の相違であらう。復古精神は十分ありし日に精通した結果ならばよいが荷ふとか其他の邪氣から生じたものなら寧ろ擧げすべきものだ。長髪も敵衣も此が分つてさへ居ればかまはない。然し自分等はザンギリで通した時代であつた。

大体五高は初めは九州人が大部分を占めてゐた。所が全國高校統一試験の結果東京方面から多数の子弟が入り込んで此人達が社會問題を研究して思想的な衝突が起つた譯だ。大川君はその一方の領袖として鳴したものである。例の栗野事件は大川君が牛耳つて、ピクともさせなかつた。此時總務の高田君は穩健派、自分も穩健派で中正演説をやつて今でも其點だけは憎まれてゐる位だ。演説と云へば今はそんな仕方は歓迎されないけれども其頃は大意壯語、美辭麗句の一點張り、自分達も市内の各所を公開演説して廻つたこともあつた。此の寫眞で見ると校内附近は少しも變つてゐないらしいが懐しいものだ。松山に居た頃は附近に高校生が澤山ゐるがよく勉強する様だ。就も近頃は人間が小柄巧になつて大學生等は科目試験だから都合のよいものからパスすると云ふ工合

に手先を働かせるが、素質に大した違はないのだから、つまる所、地道にコツコツやった方が長持がしてより有用である。

2、中京先達

(イ) 七月廿日午前十時ナンーバスクールの締括役を務むる八高に小松原校長先生を訪れる。先生は瘦身の人には稀な柔和な顔貌と態度の所有者で、静な口調で「高等學校」なるものを語られる。中頭より岡部教授も加はられて話の盡くる期も何時やら知れなかつたが、豫定に縛られた身の苦しさは、強ひてお別を告げたのであつた。

小松原隆二氏談 第六回卒

明治卅年 一部分料

今の三高に相當するものがなくなつて丁度五高が出来たから私も五高生となつた譯だが、「英雄起る所地形好し。」の古詩通りに翠こまやかなる龍田山の懷に抱かれた赤壁城は、熊本人の木訥の風と相俟つて人物養成に打つてつけの地である。而して有名な秋月・韋軒先生等から「漢文の素養。」を重んずべき事を諭されたのであつた。今では常識である社會主義は當時現在の共產主義以上に危険視されてゐたが、少し後の話である。

一年先輩に十時先生、同級に宇野、速水、春山先生等、一年後輩に藤村、秋吉、八波先生等が一頭地を抜いてゐてね、私は斯う思ふのだが、明治盛期に人材が大いに輩出したのは當時第一流の人々が文科に進んで後進の指導をしたからである。所が末期から大正になると第二流の人が、大正晩年から昭和に及んでは第三流の人達が文教に携る傾向が著しい。此は國家の爲甚だ憂ふ可き現

象である。

スポーツに關して、今の様なハイカラなものではなくて、ボートが一番はやつてゐた。兎狩も屢々行はれたもので、八高でもやつてゐるが今年は二匹しか取れなかつた。ほゞ一五高も二匹だけだかね。阿蘇位迄は出掛けるんだらう。呵々。

高等學校は一種獨特の教育機關だから君達も其を能く辨へて置かねばならぬ。此處の生徒は猛烈に勉強するが多少体が弱い。御覽の通り運動場が狭くて窮屈なんだよ。皆が協力一致して都合よくやつては居るが五高の様な譯にはいかぬ。此は都會の學校の大苦惱だ。對校戦を如何思ふかと云ふのか。純眞な氣持でフエヤプレイをやれば別に止める程のものでもなく反つて獎勵すべきである。試合に負けて口惜しいのは人間として當然で其は次の試合に勝つて鬱憤を晴せばよい。幾ら純な心からと云へ粗暴な態度は飽く迄排斥せられねばならぬ。

岡部次郎氏談 第十二回卒

明治卅六年 一部分料

私は大分の生れで後藤さんは私より一年後である。當時の縣人會の寫眞が私の手許に残つて居るが後藤さんは一番隅つ子に寫つてゐる。同窓で出世頭と云へば山崎、山室、青木さんと云ふ所だらう。

奇談としては此は話してどうかとも風ふが、山形先生が五高隨一の秀才として頭腦の明哲さを謳はれて居られたが、その他にどんな理由からか身体が丈夫でなくて「飯を食はないで生きてゐる。」と噂されたものだつた。恐らくパンを常食として居られたの

だらうと思ふ。

(ロ) 金鉢を目標に不案内の街を無茶に廻つてゐると堂々たる高樓の前に出た。此が名古屋市役所である。話を聞けば五高先輩の頭からひねくり出した設計に據つたものだとか。車を圍んで八人の先輩諸賢と歓談す。惟、時七月廿日正午の事である。

林先輩を中心にして宇佐美、小島、山形、松尾、秋田、川瀬、ポータ、マータ、ドル先生の名前が頻出する。東京廣、水谷、いろは等に於ける珍談が飛び出すのであつた。

宮永先輩が「校門の前に下駄シヤンが居てね。」と頸を撫でると林先輩が方々の地圖を示される。と早速「うかうか相手になつてゐるとどうも話が纏だ。その筈だよ時代が違ふからな、時の距りを忘れて居れば世話はない。」等と横から茶化し始める。

孟夏の陽光を窓から通して沈黙の名古屋城郭は愉快な此の會合を永遠に記憶するであらう。

宮 永 顯 二 氏	第廿九回卒	大正九年 一部英法
小 西 芳 久 氏	第卅二回卒	大正十二年 理甲
角 松 佐 太 郎 氏	第卅三回卒	大正十三年 文甲
富 永 愛 夫 氏	第卅三回卒	大正十三年 文乙
赤 木 貞 夫 氏	第卅七回卒	昭和三年 文甲
園 田 齊 氏	第卅七回卒	昭和三年 理甲
矢 野 良 亮 氏	第卅八回卒	昭和四年 文乙
林 貢 氏 談	第卅一回卒	

大正十一年

文甲

此の間公用があつて久方振りに熊本の地を踏んだが、街が廣く

明くなつてゐるのは格別驚く程の事でもないとして、早速赤煉瓦の下に飛んで行つたものだ。丁度道場で剣道の稽古があつてゐてね、黙つて見學させて貰つたが不知不識の中に血湧き肉躍るのを禁じ得なかつた。例の七高戦は私等の頃復活して何でも私が三年で夏季遠征してゐる留守中に一回勝つたきりだと覚えてゐる。ストーム、デモンストレーションと散々に暴れまくつた時代で、その爲でもあるまいが洋服が直にボロ／＼になつて何着あつても足りなかつた。君、今の學生は仲々身綺麗だよ。先生で一番印象が深いのは山形先生だ。私が何時か譯につまつたことがあつた。すると先生は「調べて來なかつたらう。」と詰問される。私は「否、調べて來ました。」と主張する。かうやつてまあ十分位も經つた頃「君、調べて來て此位が理解出來なければ低脳である。五高ではとても成學の見込はないから他處のインテキ學校にでも行き給へ。」と怒られたのには完全にノックアウトされたが、今から思へばあれがとても効果があつたんだね。

(ハ) 七月廿日午後四時、名古屋高工に入る。門衛に尋ねて本館二階に清水教授に拜肩。折よく一瀬教授も居合せられたので御同席を願ふ。嬉々として庭球に排球に戯れる生徒を眼下のグラウンドに見下し乍ら學生生活の回顧を口にされる清水教授に、白哲の一瀬教授は紅潮され乍ら黙々として頷かれるのであつた。

一瀬正巳氏	第卅一回卒	大正十一年 理甲
清水勤二氏 談	第廿九回卒	

大正九年

二部工科

私達の頃は寮の總代が龍南會の總務を兼ねてゐて、私も一寮總

代で且つ總務をやつた。一体高校生活の中心が常に寮に存する以上此が本當ではないかと思ふ。然し仕事が多になつて執務に困惑を來してね。尤も君の云ふ様な幹事制度はなくて總務委員だけだつたから非常に骨が折れた。長い目で見てみると段々制度は改善され整備されて行くね。羨しい限りだ。

寮の年中行事としては阿蘇登山、而して習字寮綱領は私が起草して委員會で可決して始めて定まつたのである。殊更文獻があつたのでもなく入學以來身に染み込んだ五高なるものを簡明に表さんと試みたのだつた。

總務としては豫算會議ボートレース運動會が主要な地位を占めてゐて、ボートレースは下齋津の往復コースを使用し應援團は舟の中で熱狂亂舞したものだつた。ふむ今年からは又齋津湖で舉行する様になつたかね。熊本ではボートは彼處に限るよ。何しろ私等の時には定遠、鎮遠——註、日清戰爭の分捕艇——を湖中に固定して大層な賑ひだつた。運動會は在來の興味本位で特別な話もないが觀衆は非常に多かつたと記憶してゐる。

あゝ洋服を刑務所に依頼してね。成程左様な理由から止めたかね。其も時勢の推移で仕方がないよ。ほゝ發火演習もないつて！彼は五高名物の一つに數へられて私等も随分馬力かけて出掛けたものだが廢止の運命は遠く此邊に因してゐたのかも知れない。

近頃は左程でもないが、私は五高時代は随分と固い方で、寮の點呼を嚴重にしたり、クラス會を街でするのは四五人の遊治郎が樂みを貪るだけだと云つて、阿蘇や金峯に登つたり齋津湖上で清遊することを以てクラス會と稱したものだ。

先年暇に任せて五高を訪れたことがあつた。行き交ふ人々にも誰一人として顔見知りの人があるない。即ち、年々歳々花相似、歳々年々人不同の句を念頭に浮べてしきりにサインカーフの櫻に見とれてゐると、途行く三四郎が不審な面指して振返るのであつた。正に、兒童相齟不相識、笑問客縱何處來の詩の現實化された風景だね。集會所は益々古ぼけ、白草原——松を出てまばゆくぞある露の原。(漱石)——がありし昔の面影を止めないのは佗しい限りである。

3、帝都先哲

(イ) 七月廿二日午後一時芝公園の三級亭で木村代議士に和目
に掛る。縁無し眼鏡を無造作に掛けてデツプリ肥えた代議士は物
柔かな抑揚で無様な私の愚問に答へて下さる。

木村正義氏

第廿回卒

明治四四年 一部獨法

問 政界に投ぜられた理由は？

私は子供の時分から政治に憧がれて將來必ず政治家にならうと固く決心した。而るに我國では政治を論ずる前にどうしても一應官吏を務めて其仕事を或程度頭に叩き込んで置かなくては物にならぬと信じてゐたから、初め内務省に入り後文部省に轉じ最近やつと政界に投じた次第である。政友會を選んだのは知人も多くゐたしその氣分が厭味がなく明朗で積極政策を探り何よりも私の心にピッタリ來たゝめである。

問 新官僚主義に就いて御感想を

私は此問題に就いて議會で廣田首相に質問したのだが大して意

味のあるものではない。從來政黨の下敷になつてゐた官僚が社會狀勢の變化に伴つて急激に擡頭し來り、その中の二三の人が稍々權を弄する片鱗を示したから斯く云ふのである。

問 社會大衆黨に對する御意見を

彼等は社會の缺陷のみを指摘するのであるから極めて單純にしたり易いわけである。抑々政治なるものは万般の事情を統一綜合しその上で是非善惡を批判決定、且つその是なるもの善なるものを實行すべき性質のものだから、万一彼等が政權を掌握したとしても決して今彼等の云ふ如くに行はれるものではない。併乍ら未だ未だ發展の餘地は十分にあると云はねばならぬ。

問 學生に望まれることは？

學生はその立場から社會の動きを注視する必要は勿論あるけれども勉強するのがその本分である。勉強するてふ根本を没却して第二義的な政治運動に没頭するが如き事は夢あつてはならぬ。

問 五高生に就いて？

在校生徒が先輩に接觸する機會は極めて稀であるが此は大變残念な事だ。折を見て先輩諸氏に色々話をして貰ふとか座談會でも開いたら相當有益と思ふが。

問 座右の銘を御伺ひしたいですが。

常に自己の地位に應じて最善を盡す覺悟だ。

(ロ) 丸の内仲通の赤煉瓦内に七月廿二日午后三時頃高野先輩を訪問。瘦身の先輩はきちんと整頓された事務所に陣取つてテキパキと話を進められるのであつた。

高野弦雄氏談 第廿回卒

明治四四年 一部英法

栗野事件直後の沈み切つた云はゞ戒嚴令下の龍南であつて、表面仲々實直を裝ふてゐたのが私達の時代だつた。然しよくよく考へて見ると私等の仲間にも相當軟派が居た様である。此は東京の諸名士の令息方が濟々鬘に鳥流しになり漸次濟々鬘が墮落して遂々五高も其に影響されたと見るべきであらう。而もカンニングが横行を極め、殊に成績のよい輩が此手を用ふるのには一同その非を鳴したものだ。無論立田山に推拾ひに行つてズル休みをする等は日常の茶飯事だつたが代返の如き性の悪い事はしなかつた。何方にしたつて五十歩百歩だがね。然し授業の時は皆眞剣で恰かも大關にぶつかつて行く進取的の氣持を以て論議し質疑したものだ。名前は一寸與るが長崎高商から轉任して來た某教授が私達の氣持を了解出來ずに、其故かクラス全体が赤丸で一大恐慌を來した事もあつたが、實力の怪しい教授は兎角生徒の質疑を好まない。運動では野球劍術等の試合を七高と戦つて、劍術は連年連勝だつた。但し肥後と薩摩は昔から仲が悪かつた上、五高主催の運動會で濟々鬘と鹿兒島中學が衝突して間もない頃なので「山雨將に至らんとす」の氣配が動いてゐたが、まあ大過なくよかつたと思つてゐる。

もう此頃になると法科萬能時代であつて、今こそ工科等素晴らしい景氣だが、當時は物の數でもなかつた。初め私は外交官になる心算であつたが本意なくも辯護士になつてしまつた。同じ法科をやるにしても現今では昔と違つて法哲學の如きものが重要視される様だ。

こんな工合で社會は絶えず變遷して行くから、宜しく君達若人は機會を掴み得る様努力すべきである。「機を見るに敏なる者は天下を制す。」と、寔に至言である。

山本百貨店の火災騒動で暫くの間歸熊してゐたが廿三跡なんか悉く皆變つてしまつた。だが君、熊本で一ヶ所昔の儘の所があるよ。知らないかな、そら京町だよ。

(六) 新橋驛で省線を捨て、田村町の東電ビルを訪れる。七月廿三日午の刻、招ぜられて頼、中島兩先輩に其處で拜眉する爲である。頼先輩は此と云つて特徴のない態度も穩かな圓滑洒脱な人である。中島先輩は例の野球部黄金時代の本壘を守つた人である。當時の新聞評を引用すれば「——元氣常に旺盛、黒味の勝つた其の緒類に負けじ魂の眼が光る。彼は以前からプレイの巧い選手ではなかつた。ギョチない事夥しい。けれども其の精悍なる氣魄は彼を鞭打つて——。」とある。私が先を急いだため詳しく當時の模様を承ることの出来なかつたのを遺憾に思ふ次第である。

頼 晴男氏談 第卅六回卒

昭和二年 文甲

私達の頃は長髪が多くて私もその一人だつたがそれ以來一度も五分刈にした事のない頭だよ。尤も余り威張れたものではないがね。

思へば随分波瀾万丈の龍南生活だつたが、其も私達で最後の止め札を立てた對七高戦を中心としての話であつて、此の中島君が當時の立役者だから門外不出と云つた秘話もある様だ。因に當會社にも色々運動部があつて中島君は野球部長だよ。呵々！豫算も

七八百圓位あるかな。健康維持費とか何とか云ふ名目で會社から出して呉れるんだ。

中島茂白氏談 第卅七回卒

昭和三年 文甲

私は生粹の熊本ツ子で中學は濟々變だ。當時濟々變にはボールが二つよりなくて、かつては随分強かつたさうだが中學の試合が禁じられて段々と下火になつたものだらう。兎も角私達有志が相計つてどうやら部らしい体裁だけは整へたのであつた。

五高に入つてからもづつと野球部に入つて捕手に選ばれた。大正十五年の春、京城中學出の高橋君が法政大學から我が龍南の地に投じ來つたので、此の年の對七高戦はホームグラウンドの利もあり全く勝つたものだと思つてゐたが、豈に計らんや愈々蓋を開いて見ると3:2のスコアで七度連敗した。此が七月十二日の話兩校應援團の衝突も此の時の事である。越えて十八日福岡春日原頭に全國高專野球大會西部豫選第一回戦に奇しき鬼神の遊戯の爲か仇敵七高と火蓋を切り3:0にて見事雪辱した。優勝戦は山高と對戦し點3:3で十三回目の時豪雨の爲中止となつたのである。更に翌日より直して此は7:2にて大勝した。卅日京都で東北代表二高を3:0にて敗り優勝戦に於て關西代表關學を2:0にて退けた關東代表明大豫科と接戦を重ねる事十九回、正に當時にあつては驚異的大試合だつたが4:2の榮冠は私達の頭上に燦然と輝いた。何しろ君、敵手には東都リーグの華形である中津川、鷲尾、米澤兄弟、錢村等の錚々たる選手が控えてゐたからね。五高軍のラインは右翼竹森、三壘松瀬、二壘篠川、遊撃廣岡、中堅

梶原 捕手中島、投手高橋、一壘稻澤、左翼阿南で、高橋、廣岡、億川等中學時代から随分と其名をうたはれてゐたものもあつたが、戦前の下馬評は何點の開きで五高の敗北かと云ふ所にあつたらし

5。
野球は何と云つても水物だよ。對七高戦敗退の原因は奈邊にあつたかと云ふに、私をして卒直に云はしむればオーバードークなんだ。ベストコンディションを如何にして試合に持つて行くべきか？は考慮の外に置いて、猛練習に猛練習と頑張つたが、其でも偶々日暮れ時分に止めることがあると翌朝は直に徹が飛んで「今年の選手はナマしてゐる。龍南の傳統と名譽を重んじない。我々一千の應援團員の苦勞を察して呉れない。」と云ふ風だつた。で、試合當日は骨と皮ばかりになつて目がいやにギョロギョロ光つたものだ。此ではバット振る力もない。いくら五高魂が猛つても仕方がなからう。後で七高の内情を探つたら大して練習も積んでゐなかつたらしい。即ち實力を養ふには不斷の練磨の功による外途はないのであるけれども過ぎたるは猶及ばざるが如しである。

今、君は何か都生活を送つてゐるかい。さうぢやないつて、駄目だね其では。

夕陽赫々と金峯に輝り映ゆる黄昏、翠なす立田山上から吹き下す涼風に淋漓の汗を拂ひ、武夫原頭に甘かな草の匂を嗅げば一切の苦惱を去つた法悦境があるのみだ。都生活への眞剣な精進による團結心の養成、忍耐力の涵養、明朗公正な精神の獲得が出来るのは、意氣と感激に燃ゆる飽く迄素直な高校生時代が一番適してゐるのだが。

(二) 防空演習に参加の飛行機が物凄く飛び交つてゐる。七月廿三日午後二時の帝都の一風景である。私は時折空を仰ぎ乍ら室町三越裏の日本銀行に今北先輩にお目にかゝる。殺されても死にさうにない受付から、濃い紫の制服の少女から案内されて柔かな絨氈の廊下を歩む。寂然たる建物の中、足音のみが際立つて聞えるのは私にはこよなき魅力であつた。司城先輩にも便宜を御計ひして貰つたが何分御多用中ゆつくり御話を伺ふ事が出来なかつた。

司城元義氏 第十回卒明治廿四年 一部法料

今北策之助氏談 第八回卒

明治廿二年 一部法料

大阪生れの私は三高へ入る心算であつたが、中學の校長先生が學都熊本の質實剛健の氣風を稱して私に勧められたので五高に入つた。入つて見ると成程人情が濃厚な所で勉強するにはもつてこの所だ。即ち辨當包みが紫色だと云つては制裁を加へた位でね、或る大阪の豪商の息子さんが矢張り五高に居たんだが、送り迎へに番頭がわざ／＼熊本迄來てゐた。勿論身に着けてゐたものは絹物ばかりだつたけれども後には郷里に居る時も熊本の質朴の風に染んで平常ですら木綿のゴツ／＼を着る様になつた。此に依つても環境の力は偉大なものだよ。

交通も非常に不便なんで、尾道から門司の間は舟だつた。無論山陽線は完通して居ず、九州本線も八代迄しか通じてゐなかつた。

入學後は寮に入つたのであるが一室十六人、階下が自習室、階

上が寢室、四人宛一團を組織する制度だった。例のコンパ全盛時代で大火鉢を中央に置き字引き——註、くじの一種にして一字一錢と定め字數だけ何錢か支出する方法——に依つて機手を買つたものだ。此の寫眞で見れば近頃の會——註 會席膳の教會を指す——なんか贅澤極まるものだね。

牧野帝大教授から聞いたのだが大學の試験に身代りをした人があつたさうだが此も試験制度の産んだ弊害だらう。さらばとて人物本位にするとか好いのだが斯うしても結局は試験しなくてはならぬのだから、生徒も父兄も先生も十分考へて貰ひたい所なんだよ。何に？義務教育年限延長を如何考へるか？云ふのか？難しい問題で一口では盡せない。私等の時分は八ヶ年だつたね。國民の知識向上は望ましいが延長したから直にどうと云ふ事もあるまい。且つ財政的考慮も必要だからね。外國語に關しては知識階級は本が讀め、大衆はABCが分る程度で結構、今日では大抵は國語で書物の用は足せるから無理して原書を購入しなくてもよい。但し漢文は別でもうあれは立派な日本語なんだ。而も知つて居れば居る程用が足せるから便利でもある。日本の銀行業に就いてか？さあ私が法科を避んだ理由は家庭の影響からであり銀行に入つたのは隱居仕事で實は大藏省畑育ちなんだよ。然し日銀は國家の中央銀行で兌換權を有するのが特徴である。國營かつて、否々株式だよ、然し總裁副總裁は簡單に云へば藏相に依つて決定される譯だ。

君 そんな固苦しいことばかりよりも私達の堂長に池田さんて人がゐてね、能く酒を浴びたもので前後不覺、金入れをなくした事もあつた様だ。酒は飲んででも飲まれちゃいかぬとは誰でも云ふ

が如何解釋するかね。要するに人間としての本分、學生としての本分を常に持せよと云ふ意味だが、飲む場合は氣持をほぐして飲まなければ飲んだとは云へないし、其處の按配が難しいのだよ。まあ云はゞ亂暴者揃ひであつたが、當時熊本には物珍しい東京辯で應對された夏目先生にはどうした譯か全く頭が上らなかつた。思へば學力と東京辯が酔興に勝つたのだな。呵々大笑。

(ホ) 七月廿四日午前中丸の内ビルディングに三菱地所課の添田先輩訪問、御忙しい折柄にも不拘赤星先輩への御紹介まで煩したのは恐縮至極であつた。併乍ら雄偉高層、日本一の丸ビル八階に屈指の大先輩と膝を交へ、靜に過去を語り現在を論じて百年の將來を計つた刹那、日本一の幸福者である様な氣持を禁じ得なかつたのである。

咄々 而も火と燃ゆる一言一句は人の肺腑を抉り抜く赤星先輩の懷古談に往時熊本政局の片鱗が閃いたので私が早速「當時の學生は政治を如何に解釋し、又其に就いて如何なる關心を有してゐたでせうか」と質問の矢を放つた所が大喝一聲、墨丸の縮み上る程叱られたのである。然れども此の間私は大いに教へられる所があつたと信じてゐる。

添田滋氏談 第廿三回卒

大正三年 一部獨法

昭和五年から東京五高會なるものを組織づけて、年一回十月十日母高創立記念日に集會を催してゐるのだがその記録は此の通りさ。殆んど過半は學生に占められてゐるけれども割合成功の部に屬する方だらう。此で總ての先輩が大いに力癪を入れて呉れば

いゝのだが、何やかやの爲、さうもいかないし。

君、五十周年の生徒側の事業はどうなつてゐるかね。もう實定期に入つて好い時だがね。總務部を中心にして委員會でも作つて頑張つたらきつと見るべきものがあると思ふのだが。此の地所課は土地の賣買をする所かつての否々々、地所課と云ふ名前からはさう思へるのだが實際は貸事務所業だね。卑近な例を取ると一種の大家さんだ。でつかい／＼日本一の大家さんなんだよ。

赤星陸治氏談 第五回卒

明治廿九年 一部法科

私達の頃から段々龍南の傳統と呼べるべきものが形を整へて來た様に思ふ。

先づ五高生の特色だが、其は眞實剛健の四字で表される。併し單に其丈ではない。と云ふのは自由自治の四字も忘れてならない他の一面であるからである。

抑々其頃熊本には保守派の國權黨と進歩派の自由黨が對立してゐて兩派の黨争は今では想像のつかない程劇しかったのであるが、又一つの流行としては自由民権の思想が非常な勢を以つて勃興し來つたものである。此に刺戟され影響された結果でもあるまいが、所謂五高の自治は此の時分確立したのであつた。

私は何時もさう思ひ、又云つても居るんだが、自由とは誠に不自由なる自由を云ひ、自治とは誠に不自治なる自治を云ふ。即ち私達は寮に多勢起き伏してゐなければ各室に室長が居つて極めて統制のとれた生活を營んでゐた。仕事をなすに當つても草案を生徒側から出して先生方と討議是非し、校長の許可を俟つて始

めて着手すると云ふ風であつた。

長い事だが、かゝる言葉が許されるとしたら「日本には天皇陛下がましまして國政を總攬される。學校には校長閣下があつて校治を纏められる。」此の理、此の形を忘れたり知らなかつたりするから現代青年は動もすれば暴動を起し、學校ストライキを惹き起すのである。學生は學生らしくあればそれでえゝ。生嚙りの事をしようとするからこそ萬事が間違ふのだ。らしくと云ふのは消極的沈滞的の様でゐてその實一直線の途であり中庸の中庸なるものである。

まあ自治の一挿話として、夏帽子の紐は今でも矢張り赤味がかつたものと思ふが、あれを決定する時は何でも本所邊迄尋ねて歩いたものだよ。林市藏さん達に聞けば此邊の消息はよく分るだらうが、何しろ稚兒さん時代で女の事を云へばボカボカ毆打されると云ふのに思ひ切つて赤色を使ふ等は相當進歩的な事だよ。私達は新舊兩骨の探長補短を何時も心掛けて龍南不滅の傳統を作り上げて行つたと言ふ事を今の若い三四郎に理解して貰ひたいものである。

(一) 七月廿四日夕方、文三乙久我君と銀座へ出て珈琲店ブラジレイロに入る。此處で、我達が五高に入つて始めて獨乙語の手解きを受けたグライルさんが待つて居られた。典型的近代好青年の師が、コーヒーを啜り乍ら息を弾ませて周囲の視線を物ともせず語りぬ。繪心ありせば一筆描かまほしき狀景であらう。

グライル氏

昭和九年四月——七月

先日迄輕井澤にゐましたが折よくドルさんにお會ひしました。皆さんお元氣の由承つて、心丈夫に思つた次第です。

叔、皆さんと共に花を賞し若葉を稱へた四ヶ月の熊本生活は、色々美しい思ひ出を織りなしてゐます。アインスツヴァイドライサー、ダンチョー、コンダレスタンツ、ローレライ、オーケー、パレス、ほゞパレスはなくなりましたか？ 私はしきりに行つたものでしたがね。お酒、ビール。深夜の街を千鳥足で彷徨ふ時肩を組んだよつばらひが何處となく消えて行くのは一幅の繪でせうが、深く飲むと屹度よいことはありません。

私は獨乙人で日本の詳しい事は分りませんが、五高生としては語學に哲學を厭と云ふ程勉強し、生活的には Die Goko—Mitsue に恥しくない様にしたら満點ではないでせうか？

文化的に水準の低い熊本で學問しようとする人にはその人獨自の工夫と異常な努力が望ましい事だと思ひます。

(ト) 豊かな白髯と物さびた聲とは如何にも龍南創生時代の神話を語るに相應しい。七月廿五日午後一時半、麻布廣尾に我等が大先輩藤本翁を訪問してあれやこれやの傳説に就いてその實相を御伺ひした。

五高が未だ古城にあつた頃の模様も略々明かになつた。猶近々當時の有様を原稿にして同窓會の方に送つて頂く御約束を頂戴したので、重複の恐れから興味ある此の項を割愛するの止むなきに至つた事を御了解下されんことを。因みに龍南第二三三號及び同窓會報第二號所載山本浩君の「先輩訪問記上古の巻その一藤本充安氏談」、同窓會報第一號所載藤本氏記の「五高同窓會報御創刊を

祝す」同第二號の同氏記「無題」、同秋月先生記念號の同氏記「秋月先生を憶ふ」等を参照せられたら裨益する所が多いと思ひます。

藤本充安氏 第一回卒明治廿五年 一部法科

4 大阪先輩

(イ) 七月廿日午後三時、野村證券會社の扉を押して横田先輩に拜眉。

卓上に電話が鳴る、事務員が部厚な書類を持込む。先輩は十分に太つた体をくるく／＼動かし乍ら感慨深い面持で思ひ出を語られた。

横田浩氏談

第十四回卒

明治廿八年 一部英法

丁度日露戦争の最中で先生達の中にも出征された方があつた爲例の發火演習は自分達だけで遂行した。私は總務であつた關係上大隊長として指揮したのだが田澤君が參謀だつたかな、確か大塚君は中隊長だつたと思ふ。まあ連勝の鼻息の荒さな工合で、大變元氣がよくて脱線續出だつた。

後藤さんは一年前だが機械体操が上手だつた様に覺えてゐる。運動としてはボートが一番ハイカラなもので遠征なんて事は減多になかつた。唯一度福岡に行つて試合をした事があつた様に記憶が微かにある位である。

ふーむ、東京に比べて大阪は落着きのない様に感ずるのかね。夫は大阪が生産、消費兩者を兼ねて、より劇甚な活動を續けて居るからであらう。

否、未だ讀まないね、ほゞ横光の家族會議に大阪氣質と東京氣

質、大阪人東京人の生活態度がそんなに克明に對照描寫してある
つて云ふのだね、何時か讀んで見よう。

私の考を卒直に云へば、東京人はより人情的情誼的で大阪人は
より算盤高いと云ふことになる。例へばタクシーは大阪は警察で
統一してメートル制だがね、此等の事實は、自分に得たと知つた
ら躊躇なく其を斷行してしまふ大阪商人の性質を何物よりも雄辯
に物語つてゐるものだよ。兎も角二者何方が善くて何方が悪いと
は云へまい。實力の世の中だから勝てば官軍だ。

5 神戸先覺

(イ) 神戸三越横の神戸學士會クラブを訪問。八月二日夕刻の
事であつた。

撞球のゲーム取の聲、將棋の駒や圍碁の石打の爽かな音、或ひ
は新聞をめくる音を外にして私は諸先輩の黒瀬先輩を中心に
雑多な話を進められるのに耳を傾けるのであつた。硝子越しに、
夏には不似合な忍びやかな雨足が落ちて、街々の灯が赤く煙ぶつ
てゐた。

藤井慎一氏 第卅三回卒 大正十三年 文甲

高橋重勝氏 第卅四回卒 大正十四年 理甲

黒瀬 弘氏談 第十四回卒

明治卅八年 一部英法

昔は横濱は輸出港、神戸は輸入港と相場が決つてゐた。今でも
神戸自身としては輸入が多いが輸出だつて統計上から云つて横濱
以上である。綿類雜貨、及び此はつい先頃迄横濱の獨占であつた
絹類等も相當此港から出る様になつた。

船舶の出入数は香港に負ける様だが貿易總額に於ては到底足許
にも及ばないだらう。

完全な仲繼港かつて？ 大体から云へばさうだけれども人口相
應の消費地ではあるし、産業でも餘り誰でも知らないが、エム精
製は完全に極東第一だらう。

街が割合に狭くつて汚いと云ふのか？ 其は京濱地方の如き天
災の爲舊來の市が壞れて用をなさないと云ふならば、又、新開地
に都市を人工的に營むと云ふならば市街改造新造もよからうが、
別段さし障りもないのに家を取除けて幅員を廣げたり、直路にし
たりする必要はあるまい巨額の財が空盡するのみだ。

藤井八郎氏談 第卅六回卒

昭和二年 文甲

總選舉は相變らずかね？ 今はもう餘程下火だつてのか？ 私
達は盛んにやつたものさ。選舉事務所を設けて其處で策を練りあ
らゆる手段を用ひたものの様である。然し何だね、手段は相當選
ばねばならない。必ずしも目的が手段を神聖にはしないから。

一体高校生活が無茶だと云ふのは血氣の若人が万事命令通りに
動いてゐた中學生活を脱して可成り自分の意志の儘に生活し得る
自由自治を得て、例へば天馬の天駘る如くに奔放に萬事をやつて
のけるからである。私は此の自分の意志に従つて生活すると云つ
ても別に我意を張り通すのではない此の態度を非常に尊重するも
のである。

人間として社會生活を營み、況んや高校生は將來第一線を率ゐ
て立つべき士であるから若き日のあらゆる出來事を一經驗とし

て、自己の人生觀、世界觀に加へて行かねばない義務と權利を有する。唯此の際注意すべき事は、其人にとつて一事件の推移が經驗となる前に破局として見舞ひはしないかと云ふ事である。二度と若い日があるものか、せいゝ大に勉強し大に遊ぶ事だよ。

四 遠征各部雜感

遠征各部の戰績を一括して評すれば、非常に能く奮闘して龍南人尙健在なりの聲を天下の識者に發せしめた事を悦ぶ者である。先づ優勝して全國高校の覇者となつた部が二つ、弓道と水泳が此である。何れも下馬評に違はず順當な結果を収めたが、此の中にあつて水泳自由型四百米八百米に於てオリソビツク記録保持者三萬の北村君を制した戸次君と、競射甘本皆中の上村君の金星は永遠に稱へられてよからう。水球ももう一息の所であつた、今後は競泳のみならず水球も併せて完勝して貰ひたい。

劍道部は惜くも優勝の一步手前でつまづいた。私は彼等が福岡での無惨な敗戦に切齒扼腕、その捲土重來大いに期すべきものがあつたのを知つてゐる丈に無限の同情を禁じ得ない。まして相手が六月定期戦に勝つてゐた佐高だけに。

排球部も、籠球部もよくやつてくれた。

庭球、端敝、馬術等皆相等であるが、柔道、野球、陸上競技は、嘗ての華かな活躍が偲ばれて現時の見る影もない凋落は云ふもなかなか愚かである。一向部員の更生新起を俟つものである。

最後に勝つた部には來年も又來々年も榮冠をかちうる様に、油斷大敵、勝つて兎の緒を締めよと提言し、不幸にして一敗地に塗れた部には今年の敗戦は來年の大勝への礎となる様精進されたし

との平凡な言ではあるが、極めて眞劍なる言葉を寄する所以のものである。

五 むすび

少年が老翁になるのは自然の成行である。榮華が極つて失意するのは人世の常である。

始つた旅は何時か盡くる期がある。私は關門海峡を九州に渡る船上、靜かに張九齡の昭鏡見白髮を口ずさむのであつた。

宿昔青雲志、蹉跎白髮年。

誰知明鏡裏、形影自相憐。

——唐詩選——

(昭和十一年八月初秋の頃)

水泳部の全國制覇を顧みて

水泳部。理二乙 山川 啓 作

近來よく龍南襲へたりの聲を耳にする。併し吾人はその意味の眞否を疑はざるを得ぬ。見よ、龍南會各部の奮闘を、活躍を!! 過去幾十年の間に培はれし傳統精神は、各部員の熱烈なる努力と相俟つて、今夏の各種大會に遺憾なく發揮せられたではないか。

◆ 楽しい練習

櫻花漸く綻ぶ四月——愈々河童のシーズンだ。東、大阿蘇の峯も漸く白の装を脱し、街でも漸く外套を脱がうとする頃、我等河童は既に制服をぬぎ襦袢をぬぎずて、禪一貫である。手を浸したゞけでも身の毛がよだつ程冷い而も綺麗に澄み切つたプールに、大